

明治初期通俗英語辞書の成立考

——『袖珍・英和節用集』第二編の場合——

呂 麗 敏

はじめに

英学資料による語彙研究には、森岡健二著『改訂／近代語の成立・語彙編』（平成3年明治書院）がある。この著書によって、近代語語彙の研究に果たした訳語の役割が具体的に展望できるところになった。ただ、使用されている資料は、英和辞書と翻訳書に限られていて、当時、庶民に向けて数多く出版された通俗辞書は用いられていない。

激動の明治時代における人々の言語生活を読む一つのカギとして、規範的な辞書の他に、現在ではほとんど埋もれて姿を消してしまった庶民向けの手軽な通俗辞書があったことを見逃す

ことはできないのではないかと思うと同時に、これらの通俗辞書の訳語もまた、近代語語彙の形成に一役を買ったに違いないと思われる。これらの通俗辞書の訳語を扱って、近代語彙研究を行おうとするに当たって、まず、これらの訳語を集めた通俗辞書について、文献学的考察を行わなければならないと思うのである。

そこで、本論は明治初期に出版された通俗英語辞書『袖珍・英和節用集』の訳語を調査し、その訳語の出所の問題を説明することを目的とするものである。

一、『袖珍・英和節用集』とは

『袖珍・英和節用集』は、明治4年（一八七二）十一月に吉田庸徳によって作られたイロハ引き通俗英語辞書である。訳語をイロハ順に、それも音節数によって配列し、片仮名発音を付した英単語を対照させたもので、和英辞書の形になっている。したがって、訳語と称するところを「見出し語」と言うべきだが、ここでは表題の「英和」という呼び方にしたがって、見出し語の部分は「訳語」という表現に統一する。同名で、明治五年に出版される『袖珍・英和節用集』の扉に「第二編」とあるので、本稿では、この通俗英語辞書を「初編」とする。

以下、その書誌を記す

題簽「袖珍／英和節用集 全」△双郭▽。扉「袖珍英和節用」。序末「明治四年辛未十一月／吉田耕識」。奥付「明治四年辛未十一月刻成／吉田庸徳著／中村最文蔵板／東京書林／泉屋半兵衛／小林喜右衛門発兌／西京・浪花・東京書肆（出雲寺文治郎他四書肆略）。板心「袖珍英和△双郭魚尾▽並彼世／伊呂波／丁付（本文）△双郭▽三書房」。序一葉、Common alphabet二葉、伊呂波目次一葉、本文九六葉（二三葉目落丁）。每半葉一〇段有野。

明治五年（一八七三）に出版された第二編の書誌をも、以下記すことにする、

題簽「袖珍／英和節用集全」△双郭▽。扉「袖珍／英和節用集／第二編」。内題「SECOND BOOK OF THE JAPANESE AND ENGLISH LANGUAGE」。奥付「明治五年壬申八月新鐫／回春樓蔵版／東京書林／若林喜兵衛／鶴屋喜右衛門／二三屋三三発兌／京阪・東京書肆（出雲寺文治郎他四書肆略）。板心「袖珍英和△双郭魚尾▽／丁付（本文）△双郭▽三書房」。いろは目次二葉、本文二七〇葉。每半葉二〇段有野。

一、『袖珍・英和節用集』初編と第二編
『袖珍・英和節用集』初編には、『大阪女子大学蔵・蘭学英学資料選』（以下「資料選」と略す）では、

…訳語の約七割は『英仏・単語編注解』△C13▽系の単語集と一致する。『英仏・単語編便覧』△C17▽などによったものかと思われる、単語の配列も類似している。…（注一）

備考、△/▽記号は『資料選』収載資料の排列記号で、Cは英学資料の単語集のジャンルを示す数字で、次の数字は同ジャンル内での排列順を示す。

と解説されている。

『袖珍・英和節用集』第二編には、序文はみられない。タイトルページにその名が明記されている著者の吉田庸徳は、明治四年『袖珍・英和節用集』初編を著しており、本書はその続編にあたる。

初編では、所収語は具体的事物を示す名詞がほとんど全部を占めているが、第二編では抽象的な名詞が数多く採用されている。

この『袖珍・英和節用集』第二編について、『大阪女子大学歳・日本英学資料解題』（以下『資料解題』と略す）には以下のように解説されている。

…本書（引用者注…『袖珍・英和節用集』第二編）は先行する権威ある書物、例えば、ヘボンの和英語林集成などから、随意に抜粋する、というような安易な行き方によったものではないという点で当時としては良心的な書物と評してよかる

うが…（注2）

すなわち、先行する書物からそのまま抜粋し、別の書物として刊行することが多い明治初期という時期に刊行されておりながら、本書には特定された、いわゆる「種本」は存在しないということが指摘されている。

本論では、『袖珍・英和節用集』第二編で多くとりあげられている抽象的な名詞を含む名詞の出所の問題に焦点を当て、それらを明らかにすることを主旨としたい。

三、『袖珍・英和節用集』と明治初期の 三つの系統の辞書の比較対照

明治初期までの英和辞書には、惣郷正明氏の著書（一九八四）によれば次の三つの系統があるとされている。（注3）

- ① 『英和対訳袖珍辞書』とその後身
- ② 『和英語林集成』付録の「英和」の部
- ③ 中国で英米人が著した英華辞書の系統

『袖珍・英和節用集』との比較対照に際して

①には、『英和对訳袖珍辞書』文久二年（一八六〇）洋書調
所 堀達之助 を資料とする。

②には、ヘボン(J.C.Hepburn)の『和英語林集成』（慶応二年）
を用いる。

③の系統では、ロフシャイト(W.Lobscheid)の『英華字典』
〔明治二年〕が高く位置づけられている。さらに、氏は同書に
おいて、続いて次のように指摘している、「このような中で、
とくに後世に大きな影響を与えたのが、明治六年、柴田昌吉・
子安敏共著『附音挿図・英和字彙』であった」。

又、『資料選』では

明治前期の非袖珍系の英和辞典は、収録語数、発音表記、
訳語、図解等の面で、オウグルビー(Ogilvie)の辞書とロ
フシャイト(W.Lobscheid)の英華辞典を底本とする『附音
挿図・英和字彙』(D11)〔明治六年、一八七三〕が他の辞
書をリードする形をとる。(注4)

このことから『附音挿図・英和字彙』とロフシャイトの『英
華字典』の関係をうかがうことができる。

資料として、明治二年刊の『英華字典』ではなく、明治五年
刊の『袖珍・英和節用集』第二編より一年遅れた明治六年刊の
『附音挿図・英和字彙』を用いたのは、ここで『附音挿図・英
和字彙』自体に着眼するのではなく、惣郷正明氏が指摘されて
いる明治英和辞書三系統の③の代表として『英華字典』を用
いるより『附音挿図・英和字彙』のほうが、英学資料を扱って
の日本語の研究を行う上で、より適当だと思っただけである。

以下『英和对訳袖珍辞書』、『和英語林集成』および『附音
挿図・英和字彙』を比較対照の資料として、『袖珍・英和節用
集』第二編の訳語を考察することにする。

考察して得た結果は次の通りで、
つまり『袖珍・英和節用集』第二
編の訳語一〇一四語の全ての名詞
は、『英和对訳袖珍辞書』に九五
三語、『和英語林集成』に四九一
語、それと『附音挿図・英和字彙』
に八九九語が合致するという結果
を得られた。数値的表に表すと以
下のごとくになる。

袖珍・英和節用集	1014語	(%)
英和对訳袖珍辞書	953	94%
和英語林集成	491	48%
附音挿図・英和字彙	819	82%

これを見ると、『袖珍・英和節用集』第二編の訳語と『英和对訳袖珍辞書』の訳語との一致する比率は94パーセントにも上ることになる、この比率の高さは『袖珍・英和節用集』第二編と『英和对訳袖珍辞書』との関係を考える上で非常に興味深い。が、『袖珍・英和節用集』と一致する比率は、『附音挿図・英和字彙』の方も82パーセントである。『附音挿図・英和字彙』の訳語は『袖珍・英和節用集』第二編のものと一致する比率は、決して低くないと言える。また、一致する訳語を一語ずつ検討していくと、『袖珍・英和節用集』第二編の訳語が、『附音挿図・英和字彙』、すなわち、前に述べた三系統の第③系の辞書をまったく参照しなかったとはいえないような印象をも受けるが、その印象は、『英和对訳袖珍辞書』の訳語の特徴および『袖珍・英和節用集』第二編の訳語との一致の割合の高さを見てみると、そのような印象を消すことはそう難しくないだろうと思うと同時に、むしろそれは『資料解題』に指摘された、

……『袖珍辞書』(引用者注……『英和对訳袖珍辞書』)は『和蘭字彙』を底本にしているので、……なお、1年後に出た『附音挿図・英和字彙』ではこれを一步進めて蘭和辞典と英華辞典の訳語を合体させることに成功している。(注5)

ということの裏付けになったかと思われるのである。

次に『袖珍・英和節用集』第二編の名詞の単語は、『英和对訳袖珍辞書』を参照したことを確定できるような決定的とも言うべきのいくつかの具体例を示すことにする。

『袖珍・英和節用集』第二編	『英和对訳袖珍辞書』
未来 Future-turity	Future-turity 未来

みの部の「未来」は、『英和对訳袖珍辞書』に Future-turity は「・」を用いて、Future あるいは Furity で「未来」を表すのに、『袖珍・英和節用集』第二編には、その使い方を気づかず、Future-turity は一つの単語だと誤解し、「未来」を表している。

次の例を見てみると

「行間違い」の可能性は極めて高い。『袖珍・英和節用集』には、実際の内容が「和英」の形になっているところを考えれば、恐らく

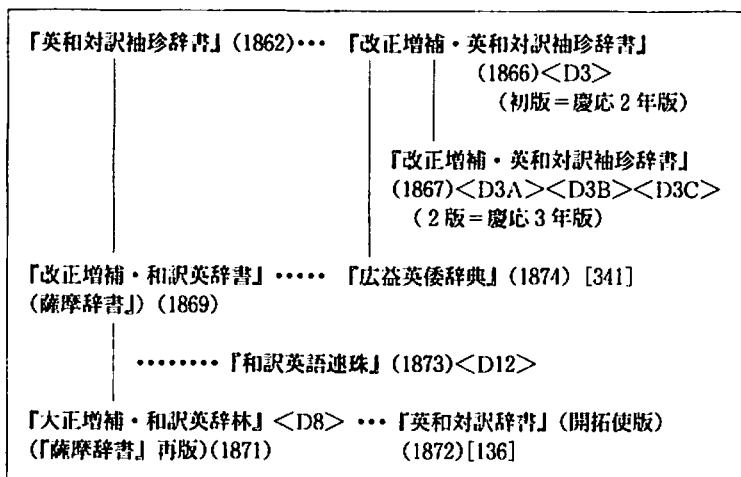
『袖珍・英和節用集』第二編	『英和对訳袖珍辞書』
イの部 糸 イト (ハリカネ) Wiper	P942L11 <u>Wiper</u> , s・箒ク人、埃排ヒ L12 Wire, s・糸 (ハリガネ)
エの部 遠慮 エムリヨ Difficulty	P212L8 <u>Difficulty</u> , s・六ヶ敷キヲ、困難 L9 Diffidence, s・不信用、遠慮
シの部 質屋 シチャ Loan	P464L3 <u>Loan</u> , s・貸シ、借り、借金 L4 Loan-bank, s・質屋
ヒの部 非常 ヒジョウ Casually	P112L14 <u>Casually</u> , adv・非常ニ、偶然 L15 Casualty, s・非常、偶然ノヲ

イの部の「糸」、エの部の「遠慮」、シの部の「質屋」とヒの部の「非常」のところに、英単語を与えようとするとき、それぞれ『英和对訳袖珍辞書』の九四二ページの十三行目の「Wire」二二二ページの九行目の「Diffidence」、四六四ページの四行目の「Loan-bank」と二二二ページの十五行目の「Casualty」を写すつもりだったが、間違って該当行の上の行、つまり、「Wiper」「Difficulty」「Loan」と「Casually」を写してしまったと思われる。

だとすれば、『袖珍・英和節用集』第二編の訳語が『英和对訳袖珍辞書』によることのもう一つの決定的な証拠になるかと考えられる。

四、『袖珍・英和節用集』第二編と『英和对訳袖珍辞書』系の辞書との比較対照

ところで『英和对訳袖珍辞書』は、その後身が、明治期に多く出版されている。ここで『資料選』の『英和对訳袖珍辞書』についての流れ図を引用し、その概略を示すことにする。



備考、< >記号は、「資料選」収載資料の排列記号で、なお、Dは、英学資料の辞書のジャンルを示す数字で、次の数は同ジャンル内での排列順位を示す。[]記号は、大阪女子大学付属図書館の排列記号である。

ここで、資料として以下の五冊を使用して「袖珍・英和節用集」の名詞語彙との合致語数を調査することにする、

- (1) 「英和对訳袖珍辞書」
文久2年(一八六二) 洋書調所 堀達之助
- (2) 「改正増補・英和对訳袖珍辞書」(初版)
慶応2年(一八六六) 開成所 堀越亀之助
- (3) 「改正増補・英和对訳袖珍辞書」(2版)
慶応3年(一八六七) 開成所 堀越亀之助
- (4) 「改正増補・和訳英辞書」(薩摩辞書)
明治2年(一八六九) 美華書院 薩摩学生
- (5) 「大正増補・和訳英辞林」(薩摩辞書)再版
明治4年(一八七二) 美華書院 薩摩学生

調査結果は、表で数値的に示すと、以下の如くなる、

袖珍・英和節用集	1014語	(%)
英和対訳袖珍辞書	953	94%
改正増補・英和対訳袖珍辞書(初版)	994	98%
改正増補・英和対訳袖珍辞書(2版)	994	98%
改正増補・和訳英辞書(薩摩辞書)	994	98%
大正増補・和訳英辞林(薩摩辞書 再版)	994	98%

「老婆」と「油煙」の英訳に着目して、それぞれ、「英和対訳袖珍辞書」系の辞書に対応している単語を調査する方法をとる。
以下、その結果を列挙する。

『袖珍・英和節用集』第二編(明治五年)「扣き」Knock、「零

表を見ると、『改正

増補・英和対訳袖珍辞書』以降の辞書は、『英和対訳袖珍辞書』より、『袖珍・英和節用集』に与えた影響のほうが大きいということが窺えるであろう。

引き続き、英語の綴りのミスを利用して、更なる調査を行うことにする。

方法としては、『袖珍・英和節用集』第二編の「叩き」「零落」

落] Downfal' 「老婆」Grandam と「油煙」Lampbrack

① 『英和対訳袖珍辞書』(文久二年)「扣き」Knock 「零落」Downfal' 「老婆」Grandam と「油煙」Lampbrack

② 『改正増補・英和対訳袖珍辞書』(初版)(慶応二年)「扣き」Knock 「零落」Downfal' 「老婆」Grandam と「油煙」Lampbrack

③ 『改正増補・英和対訳袖珍辞書』(二版)(慶応三年)「扣き」Knock 「零落」Downfal' 「老婆」Grandam と「油煙」Lampbrack

④ 『改正増補・和訳英辞書』(明治二年)「扣き」Knock 「零落」Downfal' 「老婆」Grandam と「油煙」Lampbrack

⑤ 『大正増補・和訳英辞書』(明治四年)「扣き」Knock 「零落」Downfal' 「老婆」Grandam と「油煙」Lampbrack

「叩き」「零落」「老婆」と「油煙」の対応している英語の正しいスペルは、それぞれKnock' Downfal' Grandam とLampbrackである。したがって、丁寧に改正された明治2年板と明治4年版を配慮の範囲から除くことにする。そして、文久2年板の「油煙」の英語は、Lampbrackであり、要するに、

それぞれ対応している英語のスペルの間違いは、『袖珍・英和節用集』第二編のものが『改正増補・英和对訳袖珍辞書』（初版）か『改正増補・英和对訳袖珍辞書』（2版）かとのものに酷似していることからすれば、『袖珍・英和節用集』第一編は、慶応二年か慶応三年版の『改正増補・英和对訳袖珍辞書』をそのまゝつまりスペルミスをも含めて、踏襲しているという印象を受けざるを得ない。

よって、『袖珍・英和節用集』（第二編）に影響を与えたのは、慶応二年か慶応三年版の『改正増補・英和对訳袖珍辞書』にならう。

五、『英和对訳袖珍辞書』系の

辞書に対する再検討

この章で、慶応二年版か慶応三年版か、即ち『改正増補・英和对訳袖珍辞書』（初版）か、それとも『改正増補・英和对訳袖珍辞書』（2版）かをどちらによるものかを、最終的に決めていくことにする。

『改正増補・英和对訳袖珍辞書』（初版）に関して、豊田実の著書（九六三）には以下のように指摘されている。

…慶応三年江戸再版（ただしこの「再版」は単に重版の意に解すべきである）（注6）

だとすれば、前述してきた通り、『改正増補・英和对訳袖珍辞書』（初版）か、それとも『改正増補・英和对訳袖珍辞書』（2版）かを、最終的に決めていくことが不可能だという前章と同じ結果になってしまう。

が、惣郷正明の論文（一九七七）に「この慶応三年版は、慶応二年版の英語活字の代わりに木版で新しく彫り起したものである。」との記述がある、それに、豊田実が前掲書において、この辞書について

これはいわゆる開成所辞書（引用者注…『英和对訳袖珍辞書』の厳密な意味での第三版に当たるものと思われる。（注7）

と述べている。

このような事実がある以上、更なる調査が欠かせないだろうと思われる、先ず考えられるのが「英語活字の代わりに木版で新しく彫り起したもの」のことである。以下開成所の改正増

補版の初版（慶応二年）と二版（慶応三年）を比較対照した上で、相違する部分を表で列挙する。

（注 8）

備考、頭歐字は小文字の場合、小見出しのこと示す、底線を実施したのが該当項目の見出し語になる。○符号が付けられた英単語は正しいのである。なお、二版の和訳は省略することに

初 版（慶応二年）	二版（慶応三年）
Adduction, s. 引出スヲ、向直スヲ	○ Abduction, s.
○ to be able 得ル、能フ	○ to be able
Accoil-ed-ing, v.n.et.a. 巻ク	Accon-ed-ing, v.n.et.a.
Bapipe, s. 楽器ノ名（笛ノ類）	○ Bagpipe, s.
Befoveful, adj. 便利ナル、有益ノ、相応ノ	○ Biforned, adj.
Bifoarmed, adj. 二形ノ	○ Behovful, adj.
○ Centipede, s. 百足	Centiped, s.
Circumsc pt ve, adj. 輪ノ如ク書ク、度リ限ル	○ Circumscriptive, adj.
○ Conjugally, adv. 縁組ニテ	Conjugatly, adv.
Cennatural, adj. 同シ生レノ、類族ノ	○ Connatural, adj.
Cou rer, s. 飛脚	○ Courier, s.
Crim nal, s. 罪人	○ Criminal, s.
Dogger, s. 懐剣ノ類、十字形（版行師ノ用ユル印）	○ Dagger, s.
Deedly, adj. and adv.	○ Deadly, adj. and adv.
D icipline-ed-ing, v.a. 教ヘル、躰ケスル	○ Discipline-ed-ing, v.a.
Diso mendation, s. 非難	○ Discommendation, s.
Disarrsy, s. 混雑、不順序	○ Disarray, s.
aisopligation, s. 叛クヲ、効メヌヲ	○ Disobligation, s.
○ Moxa, s. 熱艾	Movn, s.
○ The Lord's <u>prayer</u> 神拝	The bord's <u>prayer</u>
Visionary, s. 心思ノ乱レタル人	○ Visionary, s.
Wiug-ed-ing, v.a.et.n 飛フ、翼ヲ捕フ	○ Wing-ed-ing, v.a.et.n
Wttol, s. 妻ヲ不義サレテ居ルヲ耐ヘテ居ル男	○ Wittol, s.

表が示しているように、初版（慶応二年）と二版（慶応三年）の相違している英単語（厳密的に言えば、初版で間違つたスペルが二版で直されたものと、初版では正しいスペルであったが二版で新たに間違つている英単語）が二四語である。

したがって、この二四語が、『袖珍・英和節用集』第二編ではどうなっているか、それによつて、『袖珍・英和節用集』第一編は、『改正増補・英和対訳袖珍辞書』（初版）か、それとも『改正増補・英和対訳袖珍辞書』（二版）か、どちらを参照したのかが決められるのではないかと考えられる。

考察の結果は、二四語のうち、二三語が『袖珍・英和節用集』第二編に見あたらなかったことになる、残りの一語「巻ク」の英単語は、『改正増補・英和対訳袖珍辞書』（初版）では、Accoil-ed-ling であつて、『改正増補・英和対訳袖珍辞書』（二版） Accon-ed-ling であるが、『袖珍・英和節用集』第二編には、Accon-ed-ling となり、要するに、正しいスペルの慶応二年初版の Accoil-ed-ling ではなく、慶応三年二版のスペルの間違つてゐるの Accon-ed-ling をとつたわけである、したがつて、『袖珍・英和節用集』第二編の編纂過程において、開成所の改正増補版の初版（慶応二年）と二版（慶応三年）の中の二版、即ち『改正増補・英和対訳袖珍辞書』（二版）が影響を与えたことに

なる。

まとめ

本論は明治初期通俗英語辞書『袖珍・英和節用集』の続篇にあたる『袖珍・英和節用集』第二編の訳語の出所問題を解決することを主旨とするもので、その結果、『袖珍・英和節用集』第二編の編纂過程においては、『英和対訳袖珍辞書』（文久二年△・八六・√・堀達之助編）の後身である『改正増補・英和対訳袖珍辞書』（慶応二年△・八六七・√・堀越危之助編）が極めて大きな影響を与えたという結論を得ることができた。

（注）

- 1、大阪女子大学附属図書館（編）『大阪女子大学蔵・蘭学英学資料選』一九九一年 一一〇ページ
- 2、大阪女子大学附属図書館（編）『大阪女子大学蔵・日本英学資料解題』一九六二年 四五七ページ
- 3、惣郷正明『洋学の系譜―江戸から明治へ』一九八四年、研究社
- 4、同（注1） 一二七ページ
- 5、同（注2） 一五三ページ
- 6、豊田実『日本英学史の研究』一九六三年、千城書房 二四ページ

ジ

7、同書、二五ページ

8、開成所の改正増補版の二版（慶応三年）に関しては、大阪女子大学にはこれに相当するのが三部ある。洋装半裁本 $\Delta D3AV$ と和装袋綴本 $\Delta D3BV \setminus \Delta D3CV$ である。本論で、データを取る際にあたって、 $\Delta D3BV$ を使用することにした。 $\Delta D3AV \cdot \Delta D3BV$ と $\Delta D3CV$ については、「資料選」の二七ページに参照された。

それらの成立に関しては、「資料解題」は、 $\Delta D3AV$ を再版初版 $\Delta D3BV$ を再版再刷と見ている（「資料解題」発行時には $\Delta D3CV$ は大阪女子大学に収められていなかった）。

慶応二年版（以降）に三つのよく知られた誤植、すなわち、
(1) 四〇二ページにおいて左段見出し英語と右段の見出し英語が入れ替わっているミス。

(2) 七六丁と七八丁の内容が入れ違っているミス。

(3) 七九丁オ右段の訳と七九丁ウ右段の訳が入れ違っているミス。

があると「資料選」に指摘されている。

慶応二年版で生じた印刷上のずれミス(1)が $\Delta D3AV$ の洋装半裁本に、そのまま引き継がれているのが、 $\Delta D3BV \setminus \Delta D3CV$ の和装袋綴本（二〇一丁ウ）で改められている。

これが「資料解題」の「 $\Delta D3AV$ を再版初版 $\Delta D3BV$ を再版再刷」との判断の根拠になるところである。「資料選」(二三八頁)は、「誤植(2)(3)においては訂正順が逆になるので、(引用者注)これに誤ちが含まれると思う。「訂

正順」がここに存在しないと思う。(2)(3)のミスに対して、慶応三年版が新たに犯したミスで、 $\Delta D3BV$ と $\Delta D3CV$ には、それがあるのが当然であって、 $\Delta D3AV$ に対して、それについて「訂正済み」という言い方より、正しい慶応二年版を継承したと言ふべきであろう。これによって、 $\Delta D3AV$ の原本となった和装袋綴本は別にあり、大阪女子大学所蔵の和装袋綴本は慶応三年（以降の）別系統の版という見方を「資料選」がとった。

実際の調査によると、上述の二つの誤植のほか、 $\Delta D3BV$ と $\Delta D3CV$ には、

$\Delta 1 \setminus$ 百五十六丁と百五十八丁の内容が入れ違っている

ミス。

語が入れ違っているミス。

と二つのミスに対し、 $\Delta D3AV$ は、いずれも見あたらない、一見して、「資料解題」の見方（即ち $\Delta D3AV$ を再版初版 $\Delta D3BV$ を再版再刷）になるが、本論中の五章の表に示されている慶応二年版と慶応三年版の相違のところに、 $\Delta D3AV$ が、すべて慶応三年版と一致するところからも、ここで「資料選」の見方（ $\Delta D3AV$ の原本となった和装袋綴本は別にあり、大阪女子大学所蔵の和装袋綴本は慶応三年 Δ 以降の \setminus 別系統の版）をとるか、それとも $\Delta D3AV$ が、 $\Delta D3BV \setminus$ 版を基にして、最大に注意を払いながら(1)のミスをしながら)丹念に組版された新たなものかをとることにする。

いずれにしても、誤植(1)(3)それと△2▽を基にして、「袖珍・英和節用集」第二編を参照したのが、△D3A▽か、それとも△D3B▽△D3C▽(同質のもの)かを決定する可能性はある。だが、「袖珍・英和節用集」第二編に、相当する単語が載っていないので、これについて、最終的に決めていくことが不可能になる。

改正増補版に関しては、本論中においては、△D3B▽を用いることにする。